

絵本『レオンとイエレーナ』にみる保育施設における 子どもたちの参画 (Ⅱ)

Partizipation der Kinder in Kindertageseinrichtungen im Bilderbuch „Leon und Jelena“ (Ⅱ)

船 越 美 穂

Miho FUNAKOSHI

学校教育研究ユニット

(令和5年9月29日受付, 令和5年12月22日受理)

絵本シリーズ『レオンとイエレーナ』は、ドイツの保育施設での子どもたちの参画の実践をもとにストーリーが作られている。本稿では2022年までに出版された15冊の分析を行って、保育施設における子どもたちの参画の内実を明らかにすることを試みた。子どもたちは、自分たちに関係する事柄、例えば、保育施設の室内や園庭の環境づくり、遊びや生活をめぐる規則、地域の遊び場の改善などに積極的に参画していた。保育者は同じ民主主義的共同体を構成するパートナーとして、一人ひとりの子どもが参画できるように全面的にサポートしていた。今日、日本の幼児教育では「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」に言及することが多く、目標は小学校教育との円滑な接続に置かれている。これに対して、『レオンとイエレーナ』の保育施設では、目標は民主主義社会の一員として参画する能力と姿勢を育成することに置かれている。両者の目標や意識の方向性が違うことによって、保育者と子どもの関係のあり方、及び子どもの規則との関わり方も違ってくるのである。

キーワード: 『レオンとイエレーナ』, 参画, 保育者, パートナー, 民主主義

Die Bilderbuchreihe „Leon und Jelena“ basiert auf Geschichten aus der Praxis der Beteiligung von Kindern in deutschen Kindertageseinrichtungen. In diesem Beitrag werden 15 Bücher, die bis 2022 veröffentlicht wurden, analysiert, um die inneren Zusammenhänge der Partizipation von Kindern in Kindertageseinrichtungen aufzudecken. Kinder beteiligten sich aktiv an Angelegenheiten, die sie betrafen, wie die Gestaltung der Innenräume und des Gartens der Kindertageseinrichtung, die Spiel- und Alltagsregeln und die Verbesserung des örtlichen Spielplatzes. Als Partner in derselben demokratischen Gemeinschaft unterstützten die ErzieherInnen jedes einzelne Kind in vollem Umfang bei der Beteiligung. Heutzutage bezieht sich die frühkindliche Bildung in Japan häufig darauf, „wie wir uns die Kinder am Ende ihrer Kindheit wünschen“, und auf die Auffassung von einem nahtlosen Übergang zur Grundschulbildung. Im Gegensatz dazu steht in der Kindertageseinrichtung in „Leon und Jelena“ die Entwicklung der Kompetenz und Haltung zur Teilhabe als Mitglied einer demokratischen Gesellschaft im Vordergrund. Die unterschiedliche Auffassung in den beiden Ländern führt zu unterschiedlichen Formen der Beziehung zwischen ErzieherInnen und Kinder sowie der Auseinandersetzung des Kindes mit den Regeln und Vorschriften.

Schlüsselwörter: „Leon und Jelena“, Partizipation, ErzieherInnen, Partner, Demokratie

はじめに

参画と教育研究所 (Institut für Partizipation und Bildung) のクナウアーとハンゼンは、2014 年以来、子どもたちを読者対象とする絵本シリーズ『レオンとイエレーナ』を刊行している。コロナ禍 2 度目の春の 2021 年 5 月には、シリーズ 13 冊目となる絵本『おおきなえんそく』(Der große Ausflug) を出版した。この作品では、感染症によって保育施設に来ることができない子どもたちが、友達や保育者の支援によって、遠足の行き先を共同決定することに参加することが描かれている。そこには、子どもたちはパンデミックの時代においても、保育施設で参画することができる(しなければならない)という作者たちのメッセージが込められている。筆者は既に『おおきなえんそく』について日本語で紹介すると共に、クナウアーへのインタビューを通して、作者たちの思いを明らかにした¹。そして、今後の課題として、『レオンとイエレーナ』の絵本全体の分析の必要性を上げた経緯がある。なぜなら、絵本『レオンとイエレーナ』は、ドイツの保育施設²の実際の参画エピソードをもとにストーリーが作られているため、シリーズすべての絵本を分析することで、子どもたちの参画の全貌が明らかになるからである。以上のことより、本論文では、2022 年までに出版された『レオンとイエレーナ』15 冊の概要、参画と保育の特徴、及び当該絵本が現代の幼児教育に伝えていることについて論究することを目的とする。

I. 絵本『レオンとイエレーナ』の概要

絵本『レオンとイエレーナ』15 冊の物語の概要を紹介する³。

①『あたらしいクライミングタワー』(Der neue Kletterturm)



ジャングルジムが壊れ、取り壊さないといけません。3 グループ⁴すべての子どもたちは、どんな新しい遊具がいか提案を集めて採決します。そして、子どもたちは 4

つの案が反映する模型を作って、新しい遊具を作る用務員のフリッケルさんに見せます。フリッケルさんが作り始めると、子どもたちはクライミングタワーが完成し、お披露目のお祝いが行われるまで、せっせと手伝いました。

②『こどもぎかいのイエレーナ』(Jelena im Kinderparlament)



レオンは園長のシュナイダーさんが廊下に父母代表になった彼のパパの写真をかけているのに気づきました。そして、父母代表の写真の横に、グループ代表者の写真もかけるように子ども議会で発言したくて、グループの代表になりたいと思いました。グループ代表者の選挙の前には選挙戦があります。候補者は選挙用ポスターを作って、他の子どもたちに紹介します。青グループの子どもたちがレオンではなく、イエレーナとバドゥーを選んだ時、レオンは悲しくなりました。でも、イエレーナは子ども議会でレオンの願いをうまく伝えました。

③『さんりんしゃの ていりゅうじょ』(Die Haltestelle für Dreiräder)



三輪車は青、赤、黄色グループのすべての子どもたちによって使用されています。そのため三輪車をめぐっていつもいざこざが起こるので、子ども議会で乗り物の交代のための規則を決議しました。しかし、子どもたちは新しい規則が機能しないことが分ると、さらに良い解決策を探しました。最後に彼らは共同で停留所を作りました。そこでは、三輪車に乗りたい子どもたちは、他の子どもたちが乗り物交代をするまで待ちます。その時から三輪車の交代はずつとうまくいくようになりました。

④『こうえんの いぬのうんち』(Die Hundehaufen im Park)



青グループの子どもたちが公園の草むらで遊ぼうとすると、あちこちで犬のうんちが見つかりました。彼らは飼い主たちに、うんちを取り除くことを頼みたくて、標識を作って、高い草丈の中のうんちに目印をつけた。ところが年をとった女の人が、公園には犬のうんちを入れる袋の自動販売機がないと異議を唱えました。子どもたちは途方に暮れました。その時、保育者のアンヤは市長に相談することを提案しました。4人の子どもたちが市長を訪ねて、自分たちの要望を伝えました。その結果、市長は自動販売機を設置させ、子どもたちはその後援者を引き受けて、いつも箱の中に十分に袋が入っているように、今後は注意を払うことになりました。

⑤『ちょうしょくのためのばしょ』(Ein Platz zum Frühstück)



レオンとイエレーナは、お腹が空いたら、いつでも朝食を食べても良い場所を見つけるために頑張ります。なぜならイエレーナはお腹がへって登園した時、すぐに朝食をとることが許されなかったからです。レオンは積み木で大きな塔をやっと作り終えた時には、朝食の時間が既に終わっていたので、食べることができませんでした。しかし、保育者のアンヤは、朝じゅう、子どもたちの朝食の世話をすることはできません。こうして子どもたちが調理室からティーワゴンを運んで、食事の用意をし、テーブルを拭いて、ティーワゴンを再び戻すことを引き受けました。

⑥『とだなジャンプあそび』(Das Schrankspringer - Spiel)



保育者のヨッヘンはレオンとルツィアが体育室の戸棚によじ登って飛び降りることを禁止しました。なぜなら彼はそれを危険だと思っているからです。レオンは納得できません。保育者のアンヤは、レオンが子ども議会で相談することを支援しました。そこでヨッヘンは、かつて園の子どもがジャングルジムから落ちて、腕を骨折した時にそばにいたことを話しました。それ以来、彼は、子どもたちが高くよじ登る時に不安を感じるのです。子どもたちは、保育者たちにいかに注意深く戸棚から飛び降りることができるか、そしてそれはまったく危険ではないかを見せました。それでもヨッヘンは相変らず心配しているので、今後はヨッヘンとアンヤが、子どもたちを交互に体育室へ同伴することを全員で決議しました。こうして子どもたちはアンヤと戸棚ジャンプ遊びができるし、ヨッヘンともスポーツができます。

⑦『どろんこようズボンはいらない』(Die Matschhose muss weg)



レオンはどろんこ用ズボンを隠して、保育者のアンヤに「見つからない」と言いました。だから、天気が悪いにもかかわらず、特別にどろんこ用ズボンををはかないで園庭で遊ぶことが許されました。アンヤが洋服掛けの中にどろんこ用ズボンを見つけて、レオンを問い詰めると、他の子どもたちも、どろんこ用ズボンををはくとサッカーがうまくできないと苦情を言いました。子ども会議でアンヤはどろんこ用ズボンをつけないと、ズボンがとても濡れて汚れてしまうこと、そしてママやパパはきっとそれを絶えず洗濯しなくなかったのだと説明

しました。子どもたちは家政職員のノヴァクさんのところの洗濯機を使って、自分で洗うことができると提案しました。そして、今後そうなることになりました。

⑧『くつのためのくつ』(Schuhe für die Schuhe)



イエレーナはお気に入りの新しい靴を履いています。しかし室内ではそれを脱がなければいけません。室内を汚さないために、上靴かストッパー付きソックスだけが許可されているからです。このことについて彼女は保育者のアンヤに不満を言いました。なぜならアンヤも外靴を履いていたからです。しかしアンヤはこの靴を室内だけで履いています。外では彼女は別の靴を履いています。イエレーナもそうしたいと思いました。彼女は、子ども議会で発言して、室内ではすべての靴が許可されること、ただし外で履いた靴は許されないことが決定されました。さらに、園長のシュナイダーさんも外靴を履いたままであることを許可されないことになりました。ママとパパにはお城にあるような靴のための靴⁵が必要だとブルーノが言いました。子どもたちはシュナイダーさんと一緒にインターネットでお城の靴を注文して、ママとパパがお迎えの時にそれを履くように世話をします。

⑨『あたらしいはいくしゃ』(Die neue Erzieherin)



ソニヤはもうすぐ赤ちゃんが生まれるので、アンヤともう青グループで働きません。だから、子どもたちは自分のグループの新しい保育者を探すのを手伝うことになりました。アンヤと一緒に、子どもたちは新しい保育者と何をして遊びたいか考えます。アンヤによって子どもたちの願いが記録された求人情報が新聞広告に載りました。広告を読

んだ2人の女性が幼稚園で働きたいと思っています。彼女たちがアンヤと子どもたちに会うために幼稚園に来ると、レオン、イエレーナたちは園内を案内し、2人の女性が何をして遊ぶのが好きか知りました。そのあと、子どもたちはアンヤに、2人の女性のうちどちらを新しい保育者にしたいかを伝えました。そしてそれについて、大人たちが何を言うかを心待ちにしています。

⑩『さかなのためのなまえ』(Ein Name für den Fisch)



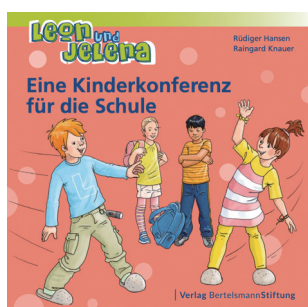
青グループの水槽には新しい魚がいて、名前をつける必要があります。しかし全員が気に入る名前を見つけることはそれほど容易ではありません。アディルとエスマはレオンの魚の餌やりの様子を観察して、お互いにささやいています。彼らは新入園児で、まだドイツ語をうまく話せません。そしていつも上着を持ち歩いています。バドゥーが魚の写真が載っている本に接近するために、アディルの上着を脇へ置こうとすると、すんでのところで喧嘩になるところでした。保育者のアンヤは、アディルがシリアからドイツへの長い道のりの間、いつも自分の上着に注意を払っていたのだらうと言いました。ついに子どもたちは「ザマーク」というアディルとエスマがたえず言っていた言葉がアラビア語の魚だということを知りました。そして新しい魚にはザマキという名前をつけることを決定しました。アディルとエスマが、名前を見つけたので、魚に餌をやることになりました。その時には、2人はもはや上着を見張っておくことを忘れていました。

⑪『ほいくえんじのための こうじげんば』 (Eine Baustelle für die Krippis)



保育園グループ⁶の子どもたちも園庭がどのようになるべきかの決定に参加すべきです。「でも、彼らにそんなことできるの？」とバドゥーは聞きました。彼はレオンと一緒に、保育園グループの遠足に同行しました。保育者のディラーラは保育園グループの子どもたちがそこで何をするのが一番好きなのか観察し、写真撮影をするつもりです。なぜなら、まだ言葉を使えない子が多いからです。レオンはパウラ、ミカたちが花壇で多くの石を使って長く遊んでいる時に、パチリと撮影しました。あとで、ディラーラは保育園グループの子どもたちにレオンの写真を見せると、彼らはとても喜びました。だからレオンのグループの子どもたちは、建設作業員から大きな石をたくさんもらって、幼稚園まで運びました。園長のシュナイダーさんは、これらの石は保育園の子どもたちのための遊具としては危険だと言いました。しかし実際にやってみると、大きな子も小さな子も、石を注意深く扱っていることに誰もが気づきました。子どもたちは一緒にトイレ付きの家を建てました。

⑫『がっこうのための こどもかいぎ』 (Eine Kinderkonferenz für die Schule)



小学生のメティンとポーラが幼稚園を訪ねた時、大きなお城の靴を履いて、廊下で滑り遊びをしてもいいことに驚きました。小学校では、先生が危険だと思っているため、ソックスで滑ることさえ許されていません。レオンは子ども議会で発言するように勧めました。しかし、小学校には子ども議会はないのです。夏に就学することになっている青グループの子どもたちがメティンとポーラのクラス

を訪ねた時に、なぜ子ども議会がないのか尋ねました。教師のファインシュタインさんは関心を示して、青グループの子ども会議を見学しました。その後、ポーラとメティンは再び幼稚園に来て、小学校でも子ども会議が出来たと報告しました。それは学級委員会と言います。

⑬『おおきな えんそく』 (Der große Ausflug)



アンヤは、洞窟、トラクターツアー、クライミングパークのパンフレットを持ってきました。というのは、青グループは大きな遠足でどこへ行くかを決めなければならないからです。その時イエレーナはレオン、マルタ、ソフィーアが来ていないことに気づきました。3人は水ぼうそうに感染していますが、遠足までにはきっとまた元気になります。彼らが遠足の行き先を共同で決められるように、バドゥーはパンフレットを写真に撮って、園長のシュナイダーさんはその写真を電子メールで送りました。子どもたちがソフィーアに希望を尋ねるために電話をかけようとしている時、彼女はメールを受け取っていなかったことを知ります。子どもたちはソフィーアを訪ねて、窓越しにパンフレットを見せました。こうして病気の子どもたちも、遠足ではコウモリを見ることができる洞窟へ行くことを共同決定しました。

⑭『せのたかいトウヒ』 (Die hohen Fichten)



レオン、ネルミン、ルツィーアは園庭の背の高いトウヒの下に洞窟を作るつもりです。トウヒはとても大きくて、古いので、隣に住んでいるケーン夫妻は嵐が来たら、トウヒが折れて、家の方へ倒れるのではないかととても心配しています。この問題について話し合っ解決策を見つける

ために、園長のシュナイダーさんは、夫妻を子ども議会に招待しました。そして、全員で一緒にトウヒを観察しました。ネルミンがトウヒのてっぺんを、のこぎりで切り落とすことを思いつきました。そうすればケーン夫妻はテラスで十分太陽を浴びることができるし、風がトウヒを吹き倒すことはできません。シュナイダーさんの妹がボランティア消防隊の青年団と一緒に来て、梢を電動のこぎりで切り落としました。小さな枝からレオン、ネルミン、ルツィーアは洞窟を作って、お披露目パーティーにみんなを招待しました。

⑮『だれもじっくり聞いてくれないとき』(Wenn niemand zuhört)



マックスはパパとクライミングパークへ遠足に行き、幼稚園にもそこにあるようなゆらゆら道を作りたいと思います。しかし彼が自分のアイデアを伝えたい人はみんな、ちゃんと聞いてくれません。彼の保育者であるアンヤは、エスマとアディルのママとまず話をするつもりです。子ども会議では、保育者のアマリールと他の子どもたちは、建築コーナーのことを話していて、マックスの話を聞いてくれません。アマリールがようやく彼の話に耳を傾けたとき、マックスがすべてを話してしまう前に、アンヤが彼女を呼び寄せました。マックスが園庭のベンチに悲しくて座っていると、用務員のフリッケルさんがマックスの様子に気づいて「どうしたの?」と尋ねました。マックスはゆらゆら道のアイデアと、誰も自分の話を聞いてくれないことを話しました。フリッケルさんはそのことをよくないと思い、マックスの許可をもらってアンヤとアマリールに伝えました。保育者たちはとても驚いて、マックスに謝りました。そして、子どもたちと一緒に、どうしたら苦情を訴えることができるかについてよく考えました。子どもたちは一緒に苦情訴え先を見つけて、誰も話をじっくり聞いてくれないとき、誰に伝えることができるのかが分かるように、ポスターに描きました。

Ⅱ. 絵本『レオンとイエレーナ』における参画の内容と特徴

絵本『レオンとイエレーナ』は保育施設の子どものたちのさまざまな場面での参画を取り上げてストーリーが展開している。筆者は、それらをおよそ以下のカテゴリーに分類して考察を試みた。

1. 民主主義的参画への問い

② こどもぎかいのイエレーナ

⑩ さかなのためのなまえ

⑬ おおきなえんそく

絵本『レオンとイエレーナ』では、保育施設でのさまざまな場面での参画が取り上げられている中、上記3冊では参画することの意味をあらためて問うていることに共通性がある。

『こどもぎかいのイエレーナ』では、保育者アンヤは子ども議会の仕組みについて、駒と皿を使って視覚的に分かりやすく説明をする。



子ども議会の仕組み(『こどもぎかいのイエレーナ』8-9)。

この作品を通して、読者である子どもたちも、立候補すること、選挙戦に関わること、投票すること、といった一連の流れを理解することができる。しかし物語の中で重要なのは、参画方法の理解と共に、候補者がどうして自分を選んでほしいのか、他の人たちのために何ができるのか、何をするつもりなのかについてよく考え、そのことをポスターに描いて、発表することである。



選挙用ポスターでアピール（『こどもぎかいのイエレーナ』14-15）。

代表に選ばれたイエレーナは、物語の最後のシーンですでに「グループ代表者は他の子どもたちの代わりに意見を言う人」という役割を理解し、友達のレオンとの約束を果たして、彼のために発言をしている。

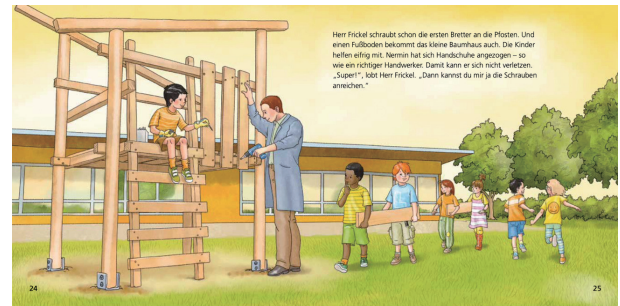
『さかなのためのなまえ』と『おおきなえんそく』では、保育施設の構成員とは誰なのか、感染症で登園できない子どもやドイツ語が話せない子どもも含めた、すべての子どもが参画するためには、何が大切なのか、といった問題が扱われている。多様性の尊重とインクルージョンを目指しているドイツの保育施設が、子どもたちの参画する権利を保障する場合、必ず直面する課題である。

2. 保育施設的环境構成

- ①あたらしいクライミングタワー
- ⑤ちょうしよくのためのばしょ
- ⑪ほいくえんじのためのこうじげんば

日本の幼児教育では、環境構成は専ら保育者の役割とみなされている。子どもたちが環境を通してさまざまな経験ができるように、保育者は教育的ねらいが達成できる適切な環境を構成しなければならない。それに対して、『レオンとイエレーナ』の保育施設では、子どもたちも環境をつくる一員である。『あたらしいクライミングタワー』では、老朽化して取り壊されるジャングルジムの後に、どのような遊具を設置するかを子どもたちが共同決定した。『ちょうしよくのためのばしょ』では、朝食をいつでも食べることのできる場所を保育室に作った。『ほいくえんじのためのこうじげんば』では、3歳未満児の子どもたちも、園庭がどうなってほしいのか、そこで何をして遊びたいのかを共同決定できることが描かれている。そしていずれの作品でも、子どもたちは、できることを手伝ったり、新たな役割を担ったりしている

ことが共通している。



クライミングタワーを作る用務員のフリッケルを手伝う子どもたち（『あたらしいクライミングタワー』24-25）。

3. 遊びや生活の規則

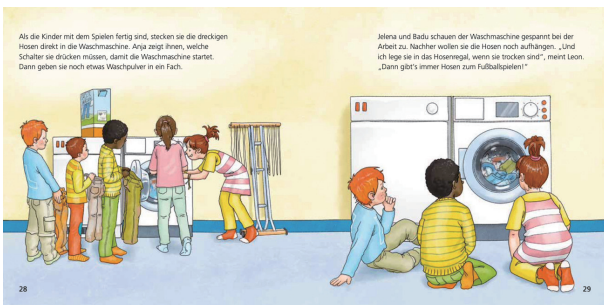
- ③さんりんしゃのていりゅうじょ
- ⑥とだなジャンプあそび
- ⑦どろんこようずボンはいらない
- ⑧くつのためのくつ

子どもたちが遊びのルールを考えたり、変更したりすることは、日本の保育施設でも行われている。しかし、『レオンとイエレーナ』の保育施設では、規則の変更は刻々の遊びの場面だけで終わることはない。比較的長期にわたって、園全体をも巻き込んで解決策が見つけれられていく。その際、保育者たちは結論を急がせないで、子どもたちからの提案をいったん受け入れて、まずは試してみる方法をとっている。しかも解決の手続きが大切で、全園の子どもたちに関わる事柄の場合は、常に子ども議会で共同決定することが特徴だ。

そして、保育者も子ども議会の中で率直に自分の思いを説明していることも留意すべき点である。『さんりんしゃのていりゅうじょ』では、子どもたちの提案で時間が来たらホイッスルを吹く役割を担った保育者ヨッヘンは、「僕だってこの規則好きじゃないよ。いつでも砂時計に注意して、楽しくないよ」と意見を述べている。『とだなジャンプあそび』では、ヨッヘンは高い所に登る子どもたちを見ると、心配でたまらないと告白する。こういった保育者の正直な気持ちの吐露は、子どもたちがより良い解決を見つけるきっかけとなっている。こうして、遊びをめぐるのルールは、子どもたちだけの問題ではなく、保育者の思いをも尊重したものでなければならないことを子どもたちは学ぶことになる。

『レオンとイエレーナ』の保育施設では、子ど

もたちは遊びの場面だけでなく、生活の場面の規則にまで意見を表明していることに大きな特徴がある。例えば、『レオンとイエレーナ』の保育施設の場合、ぬかるみの残っている園庭では、どろんこ用ズボンを履くこと、室内では上靴を履くことなどの規則が既に存在している。日本の保育施設ではすでにある規則を守ることが重視されがちである。しかし、『レオンとイエレーナ』に登場する子どもたちは既存の規則であっても、自分たちの生活にとって快適でなかったり、納得がいかないと感じた時には、異議を申し立てている。保育者側もそのことをきちんと受け止めて、子ども会議や子ども議会にかけて話し合い、必要な時には規則の変更を行うことを支援している。規則を変更する際には、子どもたちは自分たちで新たな役割を担うことになる。子どもたち自身が外遊びで汚れたズボンを、園の洗濯機を使って洗濯して、乾燥させ、棚に片付ける。その時の子どもたちは、自信を持って、主体的に行動している。このように規則の変更と共に、責任を果たす喜びが描かれていることも特徴である。



どろんこになったズボンを洗う（『どろんこようズボンはいらない』28-29）。

4. 保育者

⑨あたらしいほいくしゃ

⑮だれもじっくりきいてくれないとき

子どもたちは、保育者に何を求めているのだろうか。日本の幼児教育においても、保育者の専門性の一つに傾聴の姿勢を上げることは多い。上記絵本2冊は、子ども目線で保育者の専門性を問うている。

『あたらしいほいくしゃ』では、子どもたちは保育者を選ぶことに参画する。新聞に載せる求人情報のために、保育者のアンヤは、子どもたちの願いを「一緒に遊んでくれて、特に本を喜んで読んでくれ、タワーを作ったり、水槽を掃除したり、サッカーを一緒にしてくれる人を望んでいま

す」とまとめた。2人の候補者は対照的で、クラインは時間厳守で約束の時間に訪ねてきた。彼女は、魚の正確な名前を知っており、サッカーでは正確にシュートした。それに対して、アマリールは約束の時間には遅刻したが、正直に謝って、子どもたちの幼稚園案内を喜んで受け入れた。読書コーナーでは子どもたちのために喜んで本を読んだり、サッカーをしったりする時は、その場にいる子どもたちをうまく引き込んで、みんなでゲームを楽しんだ。子どもたちは、新しい保育者としてアマリールを選んだ。アンヤは、クラインのことを「時間を守って、信頼できる人」、アマリールは「子どもたちのことを信頼できる人」と表現している。

『だれもじっくりきいてくれないとき』では、子どもたちが求めているのは、保育者にじっくり話を聞いてもらうことであり、そうしてもらえない場合は、子どもたちは苦情を訴える権利があることが描かれている。しかも、子どもたちは保育者だけでなく、園長のシュナイダー、用務員のフリッケル、家政職員のノヴァクといった園内の複数の職員たちを苦情訴え先として選び、職員たちも快くその役割を引き受けている。

絵本『レオンとイエレーナ』を通して、子どもたちは自分たちのことを信頼して、じっくり話を聞いてくれる保育者を求めていることが理解できる。このような保育者がいることによって、子どもたちは安心して自分の思いを表現し、参画することができるのである。

5. 地域や社会への参画

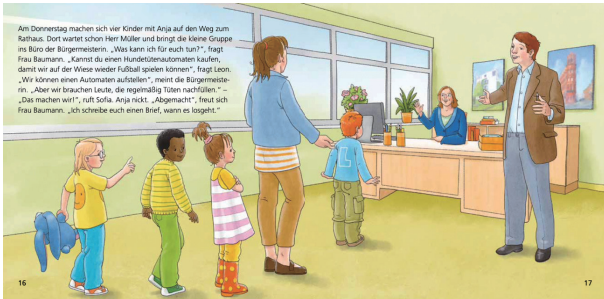
④こうえんのいぬのうんち

⑫がっこうのためのこどもかいぎ

⑭せのたかいトウヒ

『レオンとイエレーナ』の子どもたちは、保育施設の構成員としてだけでなく、すでに社会の、地域の一員として、自分たちに関係のある事柄に対して意見を言っている。『こうえんのいぬのうんち』では、町や道路の責任者の市長に意見を言って、地域の政治に参画することにつながった。『がっこうのためのこどもかいぎ』では、子どもたちは、小学校訪問の際に、小学校には子ども議会がないことに疑問を呈した。この発言に興味を示した小学校教師は、保育施設の子ども会議を見学することで子どもたちの参画する姿を見て、その意義を理解した。そして後日、小学校にも子ども会議を作った。『せのたかいトウヒ』で

は、子どもたちは自分たちの遊びの追求と、隣人のケーン夫妻の利害の間で、じっくり考えて、妥協案を見つけることを学んでいる。



市長を訪問する子どもたち（『こうえんのいぬのうんち』16-17）。

作者のクナウアーが言うように、民主主義は保育施設から始まっている。そして、子どもたちはすでに地域や社会に対して時に影響を及ぼす存在になりうることを、絵本『レオンとイエレーナ』の子どもたちは身をもって伝えている。

Ⅲ. 絵本『レオンとイエレーナ』における保育の実際

1. 保育者と子どもの関係

日本において、幼児の主体性を重んじる幼児教育が求められていることについては、保育者はもちろんのこと、幼児教育を専攻している学生においても、基本原理として理解されている。『幼稚園教育要領指導書』によれば、教師主導の一方的な保育の展開ではなく、一人ひとりの幼児が保育者の援助の下で、主体性を発揮して活動を展開していくことができるような幼児の立場に立った保育の展開を、理想的なあり方としている⁷。つまり、活動の主体は幼児であり、保育者は活動が生まれやすく、展開しやすいように意図を持って環境を構成する役割を担うわけである。このような考え方によって、日本の幼児教育では、幼児の姿、ねらい、内容、環境の構成と保育者の援助といった項目の入った指導計画を作成することが主流となっている。

『レオンとイエレーナ』の保育施設における子どもたちと保育者の関係はどのように理解することができるだろうか。クルーゲは、ヨーロッパの子ども観の変遷について18世紀まで遡って分析している⁸。およそ18、19世紀までのヨーロッパ社会では、子どもはいわゆる小さな大人として見なされていた。その後、子どもは教育的措置の

客体として捉えられた。つまり子どもはいつも優位の大人が行う教育措置の受取人であった。18世紀のルソー、ペスタロッチ、さらに19世紀のフレーベルに至って、子どもを教育プロセスの共同構築者に組み込んで、子どもの発達可能性を信頼する子ども観が生まれた。この子ども観は、20世紀の進歩主義的な教育によってさらに発展する。子どもを教育的出来事の主体として捉える子ども観では、指示的教育ではなく、追従的教育の原理が優位に立った。こうして子ども時代は、教育学的に最も意味のある人生の段階であると見なされた。20世紀後半、子ども観はさらに次の段階に入った。その転換点となったのが、1989年の「国連子どもの権利条約」の制定である。この世界的に認められた条約は、子どもの生活、及び社会的・政治的領域における子どもの権利尊重の里程標となった。クルーゲはこの新しい局面を迎えた子ども観を、社会的・教育的相互作用における「パートナーとしての子ども」と呼んでいる。絵本『レオンとイエレーナ』の保育施設では、子どもたちの参画をコンセプトとして保育が行われている。まさにパートナーとしての子ども観に基づく保育の典型的な実践を提案していると捉えられる。

従って、園長のシュナイダー、及び保育者たちと子どもたちとの関係は、いわゆる「子どもが中心」「子どもを真ん中に」を越えて、双方向的なパートナーとして支え合っている。それは、保育者や子どもたちの姿勢や言動から明らかである。

保育者は子ども会議の冒頭で「君たちは何を話し合いたいかな?」と尋ねる。そして、子どもが提案したり、異議を唱えたりすると、必ず「それじゃ、私たち⁹は何ができるかしら?」と尋ねる。このように保育者たちは指示ではなく、提案する立場を守っている。

次に保育者が行っているのは、現象面の背景にある子どもたちの気づかないことを伝えることである。それは多くの場合、人間の尊厳に関わっていることが多い。シリア出身の兄妹がドイツまで苦労して辿り着いたこと、水ぼうそうの友達にビデオ電話をかけることはやらないほうが良いなど、子どもたちが気づかないことに想像力を働かせることを促している。

さらに注目すべきは、保育者たちが子どもたちに誤りを認める場面である。保育者のヨッヘンは「もしかすると君たちは正しくて、とだなジャンプあそびはそんなに危険じゃないかもな」と自分の言動を振り返って反省している。園長のシュナ

イダーは、子ども議会でイエレーナから外靴を履いていることを「それしちゃうダメよ!」と指摘され、「君の言う通りだわ、イエレーナ。私もしてはいけないわね。明日は室内用の靴を持ってくることを約束するわ」と非を認めている。さらに、アンヤとアマリールは、忙しくてマックスの話をじっくり聞かなかったことに対して、「私たちあなたの話をちゃんと聞かなくて、ごめんなさいね」と謝って、子どもたちの苦情を言う権利を守るために支援をしていく。

保育施設の参画風土を醸成するためには、保育者と子どもの関係性がどちらかに過度に重心が傾くのではなく、パートナーとして支え合っていることが求められているのである。

2. 子ども会議と子ども議会

『レオンとイエレーナ』の保育施設では、赤グループ、青グループ、黄グループごとに行われる子ども会議と、グループ代表者のみが参加する子ども議会が機能している。子ども会議では、グループの子どもたちにとって大切な事柄について話し合う。子どもたちは何が楽しくて、何がうまく進まなかったか話すことができる。絵本から分かることは、青グループの子ども会議が、日常生活の中に根付いていることである。子ども会議は、保育者と一緒に輪になって、椅子に座ったり、カーペットに座ったり、クッションコーナーに座ったりして行われる。クッションコーナーでは子どもたちはお気に入りのクッションを抱えたり、好きなぬいぐるみを抱いたりして参加している様子が挿絵からも理解できる。



子ども会議 (『がっこうのためのこどもかいぎ』 22-23)。

これに対して、子ども議会は園長のシュナイダーが召集する。参加者は、シュナイダーの他、すべてのグループから2名の代表者と記録担当の保育者ヨッヘンで構成されている。保育園児のための緑グループが設置されてからは、保育者ディ

ラーラと未満児のミカが新たにメンバーになった。議題によっては関係者である子どもや保育者が特別に参加することもある。子ども議会と言っても敷居は決して高いものではない。『せのたかいトウヒ』では、シュナイダーは隣人のケーン夫妻を招待している。そして、「子どもたちみんなに関係する大切なことを、そこで私たちは解決します」と子ども議会について説明している。子ども議会で、シュナイダーは子どもたちを温かく迎え入れ、「君たちは何を話したいかな?」と尋ねることから始めるところは、子ども会議と同じである。子ども議会で、子どもたちの座るテーブルにはいつもジュースとクッキーが用意されていることが挿絵から分かる。

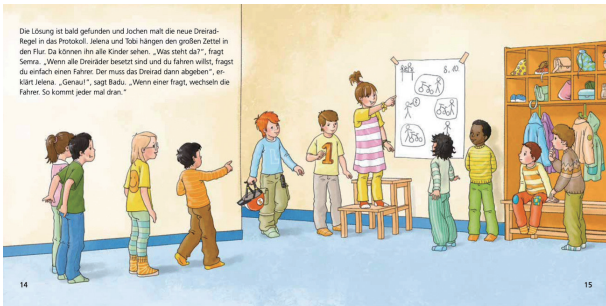


子ども議会 (『こどもぎかいのイエレーナ』 20-21)。

保育者たちは、子ども会議と子ども議会を、子どもたちがリラックスして参画することを楽しむことができる雰囲気になるよう、心を配っていることが理解できる。

3. 絵記号 (子ども文字) での記録

子ども議会で決まったことは、子どもたちが理解できるように、記録担当のヨッヘンによって絵記号で記録されて廊下に掲示される。子どもたちは送迎の親たちに記録を指して子ども議会で決まったことを話す。『がっこうのためのこどもかいぎ』で、小学校教師のファインシュタインに対して、レオンは「僕たちはこども文字 (Kinderschrift) で書くんだよ。時々、おとなよりもそれをうまく読めるよ」と答えている。



絵記号で描かれた三輪車の規則（『さんりんしゃのていりゅうじょ』14-15）。

保育園児グループの子どもたちの場合では、保育者は写真を見せながら子どもたちが思いを表現することを援助している。一人ひとりの発達やニーズに合った方法や環境が保障されるならば、どの子どもでも参画することができるが、絵本『レオンとイエレーナ』で最も伝えたいことであると言っても過言ではないだろう。

4. 職員の協力関係

日本の幼児教育においても、保育者による協力体制やチーム保育の導入が勧められている¹⁰。絵本『レオンとイエレーナ』の保育施設では、協力体制は保育者間だけでなく、園内すべてにわたっていることが特徴だ。つまり、子どもたちの保育施設での参画を、保育者たちだけでなく、園内すべての職員たちが理解し、支援している。中でも、キーパーソンは用務員フリッケルだ。フリッケルは『だれもじっくりきいてくれないとき』では、マックスの悲しみを察知して隣に座って、「どうしたの？ 君は悲しいのかい？ それとも怒っているのかい？ もしよかったら、話してくれてもいいんだよ」と声をかけている。そして、フリッケルは、保育者たちが忙しくてできなかったこと—すべてをよく聞いて、きちんと質問して—マックスを勇気づけた。さらに、マックスと保育者との信頼関係の修復の橋渡し役を果たした。後日、保育者たちと苦情訴え先を考える時、マックスは、フリッケルのことを「その時は、最高の苦情訴え先、フリッケルさんのところへ行くよ」と発言している。保育者のアマリールがフリッケルさんも忙しい時があると伝え、マックスは家政職員のノヴァクさんのところへ行くと言っている。こうして、子どもたちの苦情訴え先をフリッケルとノヴァクは快く引き受けることになった。

絵本『レオンとイエレーナ』の保育施設では、子どもたちは遊びや生活のさまざまな場面に参画

している。例えば、子どもたちは、用務員のフリッケルがクライミングタワーを作る時には、セメント作り、木材やウッドチップ運びなどをして積極的に手伝った。家政職員のノヴァクとは、毎朝、朝食の準備のために、ティーワゴンを取りに行ったり、汚れたズボンを洗濯したりする時など、日常的に交流がある。このような子どもたちと園内の職員との関係が成立するためには、職員間の協力体制が形成されていることが必要である。つまり、園内すべての職員が参画のコンセプトを理解して、自らも自分に関係している事柄に対して意見が言える職員間の関係性が作られていることが必要なのである。

5. 開かれた保育施設と保育者の参画

絵本『レオンとイエレーナ』の保育者たちは、自分たちの力だけでは解決できない場合、社会資源を活用する方法を子どもたちに提案している。例えば、それは町や道路の責任者である市長に相談することであったり、ボランティア消防隊員であったりする。その結果、子どもたちはさまざまな大人と出会い、その生き方の多様性について理解することが促進される。『せのたかいトウヒ』では、園長のシュナイダーのボランティア消防隊に所属している妹が、トウヒによじ登って、電動のこぎりで梢を刈り込んだ。この光景を見ていたルツィーアは感動して「私も消防隊の女の人になりたい」と言っている。園自体が地域に向かって開かれ、保育者が様々な社会資源を活用する術を知っていること、さらに保育者自身が地域社会や身近な政治に関心を持っていることが、子どもたちの世界を社会に向かって広げることに繋がっていくのである。

Ⅳ. 絵本『レオンとイエレーナ』の参画を支えているもの

クナウアーは、2021年のインタビューの中で次のように語った。

「民主主義的参画はあらゆる人にとっての基本的権利です。出自、性別、年齢にもかわりなく！まさにパンデミックにおいて明らかになっていることは、大人の利益に関しては十分に話題になるが、子どもや青少年の状況についてはわずかしき話題にのぼらないということです。子どもたちも自分の要望、利害、考えを提供することに対して、私たち大人は責任を負っています。民主主義は保育施設から始まるのです。」¹¹

絵本シリーズ『レオンとイエレーナ』は、前掲のクナウアーの言葉に表現されている参画の公平性によって物語が成立している。ドイツ語が話せない難民の背景を持つ子どもであっても、食事や排泄の介助の必要な年少児であっても、方法さえ工夫されれば参画できることが、作品の一つ一つで描かれている。

さらに、絵本『レオンとイエレーナ』を通して、子ども議会や投票といった参画の方法のみに着目するのではなく、参画を支えているのは、構成員たちの親密な関係性であることを忘れてはならない。それは、保育者と子どもたちとのパートナーとしての信頼関係であり、子どもたち同士の友情である。『こどもぎかいのイエレーナ』で、グループ代表のイエレーナが、子ども議会でレオンとの約束を果たすために勇気を奮って発言した原動力は、友達のことを思いやる気持ちであったろう。最後の場面でレオンは、イエレーナと一緒に頑張って、願いが達成できたことが誇らしく、彼女をしっかり抱きしめている。『おおきなえんそく』では、水ぼうそうで休んでいる友達の意見を聞くために力を尽くした子どもたちもまた、友情によって支えられていた。『さかなのためのなまえ』では、子どもたちはシリア出身のアディルとエスマ兄妹がなぜ上着やマフラーを室内でも放そうとしないのか、保育者の助言によって次第に想像できるようになる。そして最後に2人がいつも故郷のことを思い出せるように、アラビア語で魚を意味する「ザマーク」から「ザマキ」と言う名前を魚につけることを決定した。さらに、名前を考えたアディルとエスマに、子どもたちは魚の餌係を担当するように進める。その時には、アディルはもはや自分の上着を見張ることもなく、そのことに気付いたレオンと笑みを交わしている。アディルとエスマにとって、青グループが彼らの安心できる居場所になった瞬間である。

絵本『レオンとイエレーナ』の子どもたちは、不利な立場の構成員のことに気付いたり、その状況を想像したり、その構成員が参画するための方法を考えるなどの資質と能力を習得している。絵本『レオンとイエレーナ』の子どもたちの参画は、友情によって裏打ちされていることを忘れてはならない。



新しい仲間ができた（『さかなのなまえ』28-29）。

おわりに

2014年以来刊行され続けているシリーズ絵本『レオンとイエレーナ』は2023年8月末現在17冊が刊行されている。その中で、本稿では15冊の内容分析を行うことで、保育施設における参画の内実を明らかにすることを試みた。2014年以来の15冊を振り返ると、物語が当時のドイツ社会の状況を反映していることに気付かされる。2015年のメルケル政権下でのシリアからの難民の流入によって、ドイツの保育施設では一挙に移民の背景を持つ子どもの人数が増加した。『さかなのためのなまえ』ではシリア出身の兄妹がいかに関係の中で、保育施設が居場所となり得るかが描かれている。2020年以降のコロナパンデミックの影響で子どもたちの権利の保障が後回しになった状況下においては、『おおきなえんそく』や『だれもじっくりきいてくれないとき』が出版された。クナウアーらが精力的に作品を作り続けているのは、ドイツにおいて、未だあらゆる子どもが保育施設で参画することのできていない現実があるからだとも捉えることができる。

平成30年版の『幼稚園教育要領』等の刊行以来、日本の幼児教育では、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」に言及されることが多くなった。それは以下の通りである。

1. 健康な心と体
2. 自立心
3. 協同性
4. 道徳性・規範意識の芽生え
5. 社会生活との関わり
6. 思考力の芽生え
7. 自然との関わり・生命尊重
8. 数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚
9. 言葉による伝え合い
10. 豊かな感性と表現

その中で、項目「道徳性・規範意識の芽生え」の説明によれば、幼児は、「友達と様々な体験を重ねる中で、してよいことや悪いことが分かり、自分の行動を振り返ったり、友達の気持ちに共感

したりし、相手の立場に立って行動するようになる。また、きまりを守る必要性が分かり、自分の気持ちを調整し、友達と折り合いを付けながら、きまりをつくったり、守ったりするようになる。」¹²ここでのきまりとは、『幼稚園教育要領解説』でも明らかなように、基本的に遊びのルールのことである¹³。そして、遊びや生活の中での葛藤や折り合いをつける経験は、「小学校生活において、初めて出会う人の中で、幼児期の経験を土台にして、相手の気持ちを考えたり、自分の振る舞いを振り返ったりなどしながら、気持ちや行動を自律的に調整し、学校生活を楽しくしていこうとする姿へとつながっていく。」¹⁴と説明されている。

以上のように、日本の幼児教育では、きまりを守ったり、つくったりするのは、基本的に遊びの場面に限定されている。つまり、絵本『レオンとイエレーナ』の保育施設の子どもたちが、園の生活全体に関わる規則について意見を言ったり、変更のために共同決定したりするようなことは想定されていない。ましてや、保育者に対して異議を唱えることは、日本の幼児教育では望ましいとは受けとめられないであろう。『幼稚園教育要領解説』では、「幼児は信頼し、尊敬している大人の言葉や行動に基づいて何がよくて何が悪いのかの枠をつくっており、教師の言動の影響は大きい。…教師はときには、善悪を直接的に示したり、また、集団生活のきまりに従うように促したりすることも必要になる。」¹⁵と説明されている。保育者は尊敬される存在でなければならないのであって、異議を唱えられる立場ではない。

さらに「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」は、小学校教育との円滑な接続を目指して作られたことから、意識は小学校に向けられている。これに対して、『レオンとイエレーナ』の保育施設の場合は、意識は民主主義社会の一員として参画する力を育成することに向けられている。両者の意識の方向性が違うことによって、保育者との関係のあり方、及び規則との関わり方も大きく変わってくるのである。

絵本『レオンとイエレーナ』はドイツの保育施設での実際の保育実践から誕生した物語である。絵本の作品の一つひとつに出会う中で、私たちはどこに向かって子どもたちを育てようとしているのか、一度立ち止まって考えてみることも大切である。日本の幼児教育がそこから何を学ぶことができるのか、今、問われている。

謝辞 本研究では、キール専門大学教授のクナウアー氏にご協力いただいた。ドイツ語用語法については福岡教育大学非常勤講師のロナルト・ライベルト氏に助言をいただいた。ここに感謝を表す。

付記 本研究は JSPS 科研費 19K02644 の助成を受けたものである。

註

¹ 船越美穂 (2022) : 「絵本『レオンとイエレーナ』にみる保育施設における子どもたちの参画」福岡教育大学紀要第 71 号第 4 分冊, 183-191。

² ドイツの施設型保育施設は、①3歳未満児対象の保育所 (Kinderkrippe)、②3歳～就学前の幼児対象の幼稚園 (Kindergarten)、③小学生対象の学童保育 (Hort) に区分できる。現在、ドイツでは様々な形態の施設を総称して、Kindertageseinrichtungen、又は Kindertagesstätte (Kita) という名称で呼んでいる。しかし、州によって一様ではない。絵本『レオンとイエレーナ』では、幼稚園 (Kindergarten) という用語が使用されている。しかし後に保育園グループも設置されているため、本稿では0歳児から就学前の幼児対象の施設を意味する場合、主として保育施設という用語を使用する。また、日本の幼児教育について論じる際にも、幼稚園、保育所、認定こども園等を総称して、保育施設という表現を用いることとする。

³ 本稿において研究対象とした絵本シリーズ『レオンとイエレーナ』の詳細は以下の通りである。なお、2冊目以降については出版年とタイトルのみを記す。

・ Hansen, R. / Knauer, R. (2014): Leon und Jelena, Der neue Kletterturm. Verlag Bertelsmann Stiftung. Gütersloh.

2014 年

- ・ Jelena im Kinderparlament.
- ・ Die Haltestelle für Dreiräder.
- ・ Die Hundehaufen im Park.
- ・ Ein Platz zum Frühstück.

2015 年

- ・ Das Schrankspringer-Spiel.
- ・ Die Matschhose muss weg.
- ・ Schuhe für die Schuhe.

2018 年

- ・ Die neue Erzieherin.
- ・ Ein Name für den Fisch.
- ・ Eine Baustelle für die Krippis.
- ・ Eine Kinderkonferenz für die Schule.

2021 年

- ・ Der große Ausflug.

2022 年

- ・ Die hohen Fichten.
- ・ Wenn niemand zuhört.

本稿で示した概要については、参画と教育研究所ホームページの紹介文を参考にして筆者によって作成した。<https://www.partizipation-und-bildung.de> (2023.8.26)

⁴ ドイツの保育施設では、日本の幼稚園のクラスをグループ (Gruppe) と呼んでいる。ドイツの保育施設のグループは異年齢編成が多く、オープン保育も実施されている。日本のクラスとは考え方や特徴に違いも見られるため、本稿では原語に従ってグループという表現で統一した。

⁵ ブルーノは、ドイツの城などに置かれている、外靴の上から履くことができるスリッパのことを、靴のための靴と表現している。

⁶ 『レオンとイエレーナ』の保育園グループには0歳児から2歳児の子どもたちが在籍している。

⁷ 文部科学省 (2018) : 『幼稚園教育要領解説』フレーベル館, 29。

⁸ Kluge, N. (2006): Das Bild des Kindes in der Pädagogik der frühen Kindheit. In: Fried, L. / Roux, S. (Hrsg.): Pädagogik der frühen Kindheit. Weinheim: Beltz, 22-27.

⁹ ここでいう私たちとは、保育者自身のことである。

¹⁰ 前掲『幼稚園教育要領解説』, 119。

¹¹ 前掲「絵本『レオンとイエレーナ』にみる保育施設における子どもたちの参画」, 190。

¹² 前掲『幼稚園教育要領解説』, 289。

¹³ 同上, 60-61。

¹⁴ 同上, 61。

¹⁵ 同上, 188-189。